

平成17年度
教師海外研修 報告書
タイ



タイの中学生と相撲で勝負する日本の中学校教諭、
行司 兵庫県教育委員会指導主事

主催：独立行政法人国際協力機構
兵庫国際センター
運営：財団法人 PHD協会
後援：外務省、文部科学省
兵庫県教育委員会
神戸市教育委員会

兵庫セ

JR

06-01

はじめに

私ども、独立行政法人国際協力機構（JICA）は、「よりよい明日を、世界の人々と」をスローガンに、日本と開発途上国の人々をむすぶ架け橋として、互いの知識や経験を活かした協力をすすめ、平和で豊かな世界の実現を目指しております。

神戸市のHAT神戸（神戸東部新都心）地区に2001年12月17日から業務を開始したJICA兵庫では、JICAのもつリソース（人材・経験・ノウハウ）を教育の現場に還元することと、国際協力への理解の促進と担い手の育成を重視しており、教師や小中高生に対するさまざまなプログラムを実施しております。本報告書でとりあげている教師海外研修もそのプログラムのひとつです。

国際協力というと難しいイメージを持つかも知れませんが、JICAは人とおした国際協力を実施しており、途上国の現場では、途上国のパートナー（仕事相手）と一緒に座り、彼らの話に耳を傾け、彼らの力を認め、ともに働くことをしています。そして、JICA兵庫では兵庫県でも同じように、兵庫県のパートナーとともに働きたいと考えています。

2005年度にJICA兵庫で実施した教師海外研修のプログラムの特徴は、教育事情を熟知している兵庫県教育委員会および神戸市教育委員会と、タイでの国際協力の現場経験が豊富な財団法人PHD協会という2つのパートナーと共同で企画・運営していることです。そのため、兵庫県が持っているネットワークと企画力を、教育委員会、PHD協会をおして発現したのが、今回の教師海外研修だったと考えております。

この報告書は、2005年7月31日から8月7日までの期間、(財)PHD協会の同行のもとで、1週間タイの研修旅行に参加された教師の皆さまの授業実践例を冊子としてとりまとめたものです。この冊子が開発教育や多文化共生教育に関心のある方々の参考資料として、「総合的な学習」等の教育現場での一助になれば幸いに存じます。

最後に、協力くださった兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、神戸新聞社等の関係者、運営委託先（財）PHD協会に対し、心から感謝の意を表します。

2006年2月
独立行政法人国際協力機構
兵庫国際センター
所長 大石 千尋

目 次

1. 教師海外研修 平成 17 年度概要 …… 1
2. 平成 17 年度教師海外研修（タイ王国）報告書 …… 3
兵庫県教育委員会事務局人権教育課 樋口正和
3. みんなちがって、みんなすてき！世界は1つ！ ……12
神戸市立兵庫大開小学校 森田みや子
4. 心をつなごう タイの友だちと ……19
～タイのことを知って、タイの小学校に手紙を書こう～
神戸市立柱木小学校 村上力磨
5. 世界のみんなが幸せになるために ……23
～伊水から世界をのぞこう～
兵庫県立伊水小学校 数元佐和子
6. タイを知ろう。そして、世界を知ろう。 ……30
淡路市立富島小学校 今谷 正
7. アジア文化を体験しよう ……40
～地元に住むアジアの方を招いて～
宝塚市立長尾中学校 岡坂隆志
8. 体 近づく・心 近づく ……53
一粒の砂に世界を見る 「新しい人」づくり
プロジェクト 2005 「幸せの(リンク) タイの風」
姫路市立山陽中学校 植村妙江
9. 教師海外研修(タイ)を英語の授業に活かして ……63
～国際理解の視点を英語の授業に用いる試み～
県立御影高等学校 江崎千衣子
10. あとがき ……81
11. 参考資料 ……82
（1）神戸新聞記事
（2）募集要項



教師海外研修 平成17年度（2005年度）概要

研修のねらい：

平成14年度から「総合的な学習の時間」が順次導入されました。JICAは「総合的な学習の時間」において、諸外国との関係や異文化理解について取り組まれることを期待し、国際協力事業を通じて培った経験や人材、ネットワークを活用し、積極的に協力して行きたいと考えています。

本研修は、国際理解教育（多文化共生教育）・開発教育に関心のある教職員に対し、開発途上国の社会・教育事情や開発途上国で行われている様々な協力活動訪問を通じ、その経験を帰国後の授業実践に活かし、生徒の国際理解、国際感覚の養成につなげてもらうことを目的に実施しております。

主催：独立行政法人国際協力機構 兵庫国際センター（JICA兵庫）

運営：財団法人PHD協会

後援：外務省、文部科学省、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会

参加者： (順不同、敬称略)

所 属	職 名	氏 名
兵庫県教育委員会事務局人権教育課指導係	指導主事	樋口 正和
神戸市立兵庫大開小学校	教諭	森田 みや子
神戸市立桂木小学校	教諭	村上 力磨
宍粟市立伊水小学校	教諭	敷元 佐和子
淡路市立富島小学校	教諭	今谷 正
宝塚市立長尾中学校	教諭	岡坂 隆志
姫路市立山陽中学校	教諭	植村 妙江
兵庫県立御影高等学校	教諭	江崎 千衣子

ファシリテーター

所 属	職 名	氏 名
財団法人PHD協会	総主事代行	藤野 達也

海外研修同行者

所 属	職 名	氏 名
神戸新聞社	記者	宮本 万里子

研修日程：

第1次事前研修：平成17年7月 3日（日）10時～17時 場所：JICA兵庫

第2次事前研修：平成17年7月30日（土）15時～18時 場所：国際交流基金関西国際センター

海外研修：タイ

日程	曜日	時間	内容
7月31日	日	11:45	TG 623 関空発（15:05/バンコク着）
8月1日	月	9:00	JICA タイ事務所訪問
		13:00	TG044 でバンコク発
		14:06	コンケン着 →カラシン 村滞在 ホームステイ

8月2日	火	終日	村滞在 視察・交流 ホームステイ
8月3日	水	終日	村滞在 視察・交流 ホームステイ
8月4日	木	終日	教育省・青年海外協力隊活動視察（作業療法士・米持隊員）
		24:45	コンケン駅出発(車中泊)
8月5日	金	午後	新バンコク国際空港(スワンナプーム)建設現場視察(円借款)
		夕刻	JICA・タイ派遣中シニアボランティアとの交流会
8月6日	土	終日	市内視察（スラム街 スアンプルースラム）
8月7日	日	07:35	TG 774で帰国（15:05 関空着）

参考（募集条件など）：

参加資格：

- (1) 小学校・中学校・高校の教職員で、授業もしくはクラブ活動で開発教育・国際理解教育（多文化共生教育）を実践されている方
- (2) 海外研修に際し、健康上支障がなく、全行程参加可能な方
- (3) 年齢50歳以下の方（応募時点）
- (4) 所属する学校長の推薦が得られる方
- (5) 研修後、JICAが実施する開発教育支援事業に協力可能な方
- (6) 過去に本研修に参加された方、青年海外協力隊、JICA専門家、シニア海外ボランティア等JICAから海外に派遣された経験のある方は除く

参加費用：

	個人負担経費	JICA負担経費
国内研修	食費 パスポート取得にかかる費用 予防接種料（必要に応じ） 追加保険の加入費用 その他個人的性格の費用	交通費 査証代 国内旅行保険 空港使用税
海外研修	食費 追加保険の加入料 その他個人的性格の費用	往復渡航費 現地での宿泊費 JICA国際協力共済会加入費用 空港使用税 現地研修活動に必要な費用

- (1) 本事業は研修旅行であり、JICAにおける労災保険等の適用はありません。
- (2) 所属先の業務出張扱いにて参加される場合は、各所属先の責任において、参加期間中の業務上災害に対する補償措置をとってください。
- (3) JICAは出張命令依頼書等の発出を行いません。
- (4) 帰国後は帰国報告会での発表を目指し、合同で教材開発をしていただきます。
- (5) 帰国報告と開発された教材を報告書に編集し、より多くの先生方に活用していただくべく、県内関係機関並びに全国12箇所のJICA国内機関に配布いたします。

平成17年度教師海外研修（タイ王国）報告書

兵庫県教育委員会事人権教育課
指導主事 樋口正和

1 はじめに

平成17年7月31日（日）から8月7日（日）までの8日間、JICA主催の教師海外研修に参加し、タイ人児童生徒が在籍する公立学校教員2名を含む8名の教員とともに、タイ王国（以下、「タイ」とする。）を訪問した。

今回の研修では、教育関係機関等の訪問やホームステイを通して、タイ人児童生徒や保護者の生活習慣、文化を理解するとともに、タイの教育についての現状や保護者の思いや願いを知ることができた。その研修の成果をもとに、8名の教員は勤務校で、子ども多文化共生教育、国際理解教育、開発教育にかかわる授業を行った。以下、その報告を行うとともに、今後、県下の子ども多文化共生教育、国際理解教育、開発教育を推進する一助としたい。

2 報告書の構成

この報告書全体は、タイでの研修成果を踏まえて、参加教員8名が各学校で実践した授業の報告である。

最初に授業を行う際の視点となる、子ども多文化共生教育、国際理解教育、開発教育の概要について説明する。

次に、この研修の日程及び行程について、概要を報告する。

そして、参加教員8名の授業実践を報告する。

3 子ども多文化共生教育

(1) 兵庫県におけるタイ人児童生徒をめぐる状況

兵庫県では、現在10万人を超える外国人登録があり、531名（平成16年12月末）がタイ人である。3名が公立小・中学校に通っており、そのうち2名は、日本語指導を必要とするため、兵庫県教育委員会から、子ども多文化共生サポーターを派遣し、生活適応や学習支援、心のケア等の支援を行っている。

タイ人児童生徒は、日本語理解が不十分なことや日本の学校生活になれていないこと、また、日本人児童生徒が、タイの文化や習慣への理解が不十分なことから、いじめや仲間はずれなどの問題が起こっている。

この事例は、タイ人児童生徒だけでなく、すべての外国人児童生徒に共通して起こっていることである。この課題解決を図るためには、子ども多文化共生教育に全力をあげて取り組むことが求められている。

(2) 子ども多文化共生教育の取組

兵庫県教育委員会は、子ども多文化共生教育を推進し、外国人児童生徒の自己実現を図ることを支援する取組とともに、すべての児童生徒に「豊かに共生する心」をはぐくむ取組等を行っている。

ア 外国人児童生徒に自己実現を図ることを支援する取組の視点

同質にとらわれがちな日本の社会において、外国人児童生徒は母国の文化や言語にふれる機会が少ないことなどにより、自己を肯定的に受けとめにくい状況が見られる。

このような状況を踏まえ、あらゆる教育活動の中で、外国人児童生徒の自尊感情の育成を促すとともに、母語や母文化にふれる学習機会の提供に努めることが大切である。

また、日本語理解が不十分な外国人児童生徒においては、日本語指導をはじめ学力の向上を図る取組など、外国人児童生徒に対する学習指導や進路指導を充実させ、自己実現が図れるよう支援することが必要である。

イ すべての児童生徒に「豊かに共生する心」をはぐくむ取組の視点

国籍や民族の異なる外国人児童生徒が多く在籍している現状から、学校において、国籍や民族の「違い」を「違い」として認め合い、異なる文化や生活習慣、価値観を受容しあい、「豊かに共生する心」をはぐくむ取組が求められている。

そのため、人権尊重を基盤に、異なる文化や生活習慣、価値観に対する理解を図り、すべての児童生徒に自分の国や地域の文化や歴史を尊重する態度を培うとともに、多様な文化を持った人々と共に生きていくコミュニケーション能力を育成するなど、豊かに共生していくための資質や技能を身につけさせることが重要である。

4 国際理解教育

(1) 国際理解教育とは

国際理解教育は、①自国の文化や伝統を大切にすること、国の歴史や文化について理解を深めること、②異なる文化を理解し尊重する態度を育成すること、③多様な文化を持った人々と共に生きていく態度を育成することをねらいとした教育である（兵庫県教育委員会『平成17年度指導の重点』）。

(2) 国の歴史や文化について理解を深め、自国の文化や伝統を大切にすること

タイの学校では、民族音楽や舞踊の授業があり、自分たちの国や地域の音楽や踊りを学んでいる。訪問するとタイの音楽や踊りで歓迎していただいた。日本から来た私たち訪問団も、音楽や踊りなどの日本の文化を紹介することが求められた。

訪問したバンチャー小・中学校では、2時間ほど時間をいただき、「ふるさと」の歌や「デカンショ」踊り、相撲やけん玉、日本とタイの違いなどについての紹介し、全員で体験する授業を行った。事前に準備しておけば、言葉が通じなくても、身振り手振り簡単な英語で授業を行うことができた。

国際理解教育の実践においては、異文化理解、異文化体験など異なる文化を理解し尊重する態度の育成に重点を置いた取組が多い。しかし、様々な交流を深めていく中で、自分が住んでいる国や地域の文化は何なのか、それを大切にしているのかということが問われてくる。

国際理解教育は、自分の国や地域の文化とともに、異なる文化を理解し尊重する態度を育成することを通して、多様な文化を持った人々とともに生きていく態度を育成することにつないでいくことが求められる。

5 開発教育

(1) 開発教育とは

開発教育は、発展途上国の現状やこれらの国々が抱える課題について理解を深め、開発途上国と先進国の関係を含め、国際社会の問題解決に向けて何らかの形で参加する意識を養うことを目的とした教育である（『JICA FQA』）。

また、NGOは、開発教育は、一人ひとりが開発をめぐる様々な問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、共に生きることのできる公正な地球社会づくりに参加することをねらいとした教育活動と捉えている。

(2) JICAの開発教育の取組

JICAでは、開発教育を支援するために、様々な取組を行っている。とかく伝えられがちな途上国の悲惨な面ばかりではなく、協力隊員や専門家が途上国で経験してきた素晴らしさを伝え、国際理解につなぐことをねらいとしている。

ア 国際協力出前講座

開発途上国の実情を知り、国際協力の必要性の理解を広げるために、JICAから職員や青年海外協力隊のOBやOGなど途上国で国際協力に携わった人材を講師として学校などに派遣する「JICA国際協力出前講座」がある。

淡路市立富島小学校では、JICA職員及び研修員が学校を訪問し、出身国の写真を見て考えたり、民族衣装の試着を行うなどの授業を行った。

イ 教師海外研修

開発教育に関心がある小・中・高等学校の先生を対象に、途上国の国際協力の現場を視察する「教師海外研修」のプログラムがある。今回のタイ訪問も、この研修の一環として行われた。

ウ 開発教育指導者研修

JICA兵庫において、開発教育の取組の実践例や教材作成の方法などを広めるため、兵庫県教育委員会、PHD協会等関係機関・団体と連携し、開発教育指導者研修会を行っている。平成17年度は、8月に2日間、参加者のニーズを合わせながらワークショップ形式で行われた。

エ 国際協力実体験プログラム

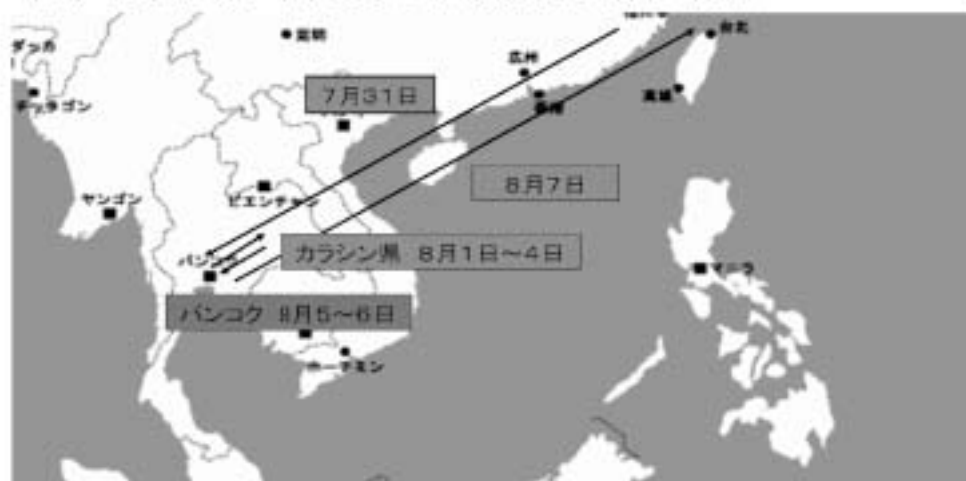
JICA兵庫では、中学生を対象とした国際協力実体験プログラムを実施し、県内外国人学校の訪問や、研修員との交流、講師による講義やワークショップなどを通じて、途上国の現状などについて考える機会を提供している。

オ 情報提供

開発教育を支援するため、開発教育に関する副読本や教材の作成、ホームページによる情報提供等を行っている。

6 日程及び行程

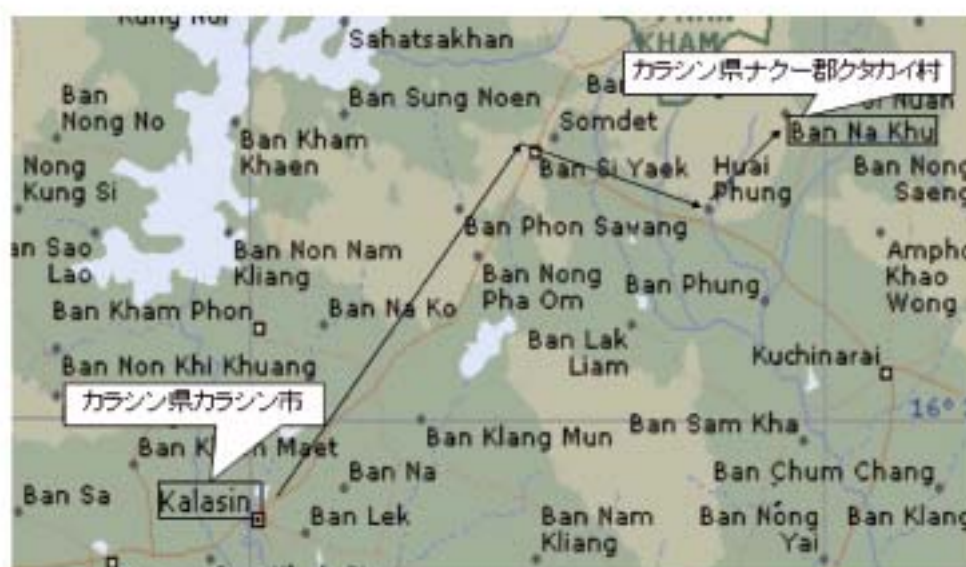
(1) 日本からタイ、カラシン県までの日程・行程



(2) バンコクからカラシン県クタカイ村までの行程



(3) カラシン県カラシン市からクタカイ村までの行程



(4) 訪問先の概要

8月1日(月)

訪問先	内容・所感
JICAバンコク事務所の表敬訪問	佐藤事務所長より、日本とタイとの関係はアユタヤ王朝(日本人町、山田長政)にさかのぼること、現在は資金援助に加えて人材派遣による技術協力を行っていることなどの話を伺った。
カラシン県ナクー郡サイナワン町クタカイ村のパムルン氏宅	国立公園の指定により、土地を奪われた農民に対して補償金を支払うよう国に求めて運動を行った農民運動家パムルン氏のビデオを見て、話を伺った。
ホームステイ先のケユーンさん宅(岡坂、樋口)	1日～3日とホームステイ。ケユーンさん(33歳)、妻のニンさん(24歳)、長男のアノン君(1歳)の3人家族。ケユーンさんは、PHD協会の研修生として兵庫県を中心に日本で1年間有機農業を学んだ。牛の糞で堆肥をつくり活用している。

8月2日(火)

クタカイ町のアナマイ(診療所)の訪問	診療所では、医師ではなく保健師が診療し薬を処方している。重い病気は、10km先の病院で診察を受ける。健康相談や健康体操など、病気の予防も重点的に行っている。
農業生産組合の精米所の見学	国際通貨基金(IMF)の無償支援で建設された精米所を見学した。大規模施設であるが稼働率が低く、使用料金が高いため、経営的には苦しい。経済支援の在り方を考えさせる施設であった。
田植えの見学	タイ東北部では7月下旬～8月上旬に田植えを行い、11月に収穫する。最近では水牛ではなく、ほとんど耕耘機を使っている。田植えは、人間が苗を握って、5列植えては後ろに下がっていく。紐は張らない。日当は120～150パーツである。
クタカイ村内の織物生産組合の見学	大分県の一村一品運動の影響を受け、村で生産された綿織物・絹織物を販売し、現金収入を得ている。生地は良いが、縫製技術に課題があり、生産組合長は、日本での技術研修を望んでいる。

8月3日(水)

バーンチャ小学校・中学校	8月は雨期で、気温が高くなく、登校して勉強する。3月～5月が乾期で暑く、学校は休みとなる。午前中、日本人教師は、歌や踊り、相撲やけん玉の紹介、日本とタイの違いなどについての授業などを行った。休み時間は、ゴム跳びやサッカーなどを行っている。
--------------	---

クタカイ小学校・中学校	小学校の英語と音楽の授業を見学した。英語は週3回ある。音楽は、エレキギターや民族楽器の演奏や歌を聞いた。「先生を大切にしましょう」という曲には驚いた。演奏は男子、踊りは女子という区別があるようだ。
クタカイ村での送別会	村の神パーを祀る祭壇をつくり、一人一人の右手首に木綿糸を巻いて、旅の安全を祈る儀式をしていただいた。その後は宴会があり、村長さんをはじめ村民と親交を深めることができた。かつて、日本軍が来て、村で映画を上映したことがあるという話を聞いた。

8月4日（木）

青年海外協力隊員が活躍するコンケンにある教育省普通教育局第9区特別教育センターの視察	作業療法士の米持隊員が派遣されている。姿勢が保ちにくい肢体不自由児に対して、お金をかけずに身近にある段ボール箱とガムテープを使って椅子等を作成し支援を行っている取組には感動した。タイ人は、教えたことはその通りするが、現状にあわせて創意工夫して作成する力が弱いという指摘があった。
--	---

8月5日（金）

新バンコク国際空港（スワンナプーム空港）建設現場の視察	日本の有償資金援助（円借款）により、新空港が建設中である。工事は予定より遅れている。国土交通省から専門職員が派遣され、開港後の滑走路などのメンテナンス等についてのマニュアルをタイ側と協同で作成するなど、ソフト面での支援も行っている。タイ人は指示されたことは確実にするが、現状にあわせて工夫・改善する姿勢に課題があるとの指摘があった。
JICAタイ派遣シニアボランティアとの交流会	日本の企業を退職後、バンコクでシニアボランティアをされている技術者の話を聞いた。

8月6日（土）

バンコク、スアンプルースラムの視察	2004年4月に大火災があり、約8000人が焼け出されたが、死者はなかった。日本のNGOシャンティなどが、図書や食料などで支援に入っていた。タイ東北部からの住民が多い。子どもたちはタイのダンスを踊ってくれたり、タイ語に翻訳した日本からの絵本を読んでもくれたりした。生き生きとしていた姿が印象的であった。
-------------------	---

（5）ホームステイ先のカラシン県ナクー郡サイナワン町クタカイ村について

クタカイ村は、タイ東北部に位置し、バンコクからは、飛行機でタイ東北部の中心地コンケンまで飛行機で約1時間、コンケンから車で約3時間半のところにある。当たり一面田んぼが広がっており、日本のような山はなく、土は赤茶けている。

タイ東北部は、経済的には貧しく、現金収入を得るためバンコク等へ出稼ぎに出る人が多い。バンコク市内のスアンプルースラムでは、タイ東北部の人が多くいるという。

今回は、教師海外研修の運営を担当する（財）PHD協会が、クタカイ村の若者を

研修生として受け入れた縁で、クタカイ村でホームステイをすることができた。

(6) ホームステイ先一覧

	ホームステイ先	宿泊者名	備考
1	ワラヤ・ジッジョン	藪元・植村 江崎	女性・現在40才・88年6期1班研修生
2	サウェー・ムアンチャン	森田・宮本 藤野	男性・現在47才・91年9期研修生
3	ノバドン・カヨムドゥ	村上・今谷	男性・現在29才・00年18期研修生
4	ケユーン・カヨタ	樋口・岡坂	男性・現在31才・01年19期研修生

※年は、PHD協会の研修を受けた年

7 教師海外研修で学んだことなど

(1) ホームステイ先のケユーンさん家族について

村では、4軒に分かれてホームステイをした。私と岡坂教諭は、(財)PHD協会の研修生として1年間日本で有機農業を学んだケユーンさん宅に3日間お世話になった。2年前に結婚したニンさんと、現在は1歳6ヶ月になるアノン君の3人家族である。1年間日本に留学したこともあり、日本語でのコミュニケーションは十分できる。

ケユーンさんは、地元の高卒卒業後、コンケンで2年間勉強して電気技師の資格を取り、電気工事の仕事をしていたが、退職して出身地のクタカイ村で農業をしている。

ケユーンの父から受け継いだ田んぼは15ライ(1ライ=16a)で、米による年間収入は8,000バーツ。牛を6頭、豚を10頭飼う。1年に牛2頭を売り、1頭6,000バーツである。牛の糞で堆肥をつくり、化学肥料を使わない有機農業を行っている。米の売値が安いのと、ガソリン価格の高騰(1年でリットル16バーツ→26バーツ)が家計を圧迫している。電化製品は、電灯と冷蔵庫、テレビ、扇風機である。ガスコンロはなく、薪で調理を行っている。お金があれば、家を改造したいと考えている。また、子どもには、農業をついでほしいと思っている。

(2) サイナワン町の小学校・中学校の様子について

国王や王妃の写真が学校をはじめいろんな所に掲げられ、王室が尊敬されている。教師の社会的地位が高く、生徒や保護者は教師の言うことに従うというスタンスである。保護者が学校に要望を伝えることは、はばかりられる面があるようだ。

全校集会では、生徒たちは教師の指示に従い、きちんと座って待っている。

タイの小学校や中学校の英語の授業は、週3時間程度あり、会話が中心である。一部生徒はノートを取っているが、他の多くの生徒は取っていない。

タイの小学校の音楽の授業では、楽譜はなく、楽器の音を聞いて覚えて、演奏している。民族舞踊は女子生徒が行い、音楽の演奏は男子生徒が行っている。

子どもの数が多く、上級生も下級生も一緒になってサッカーやタクロー(セバタクロー)、ゴム跳びなどをして遊んでいる。

(3) 教育指導への活用について

ア タイ児童生徒への指導について

- ・タイ人児童生徒や保護者は、国民性や文化的な背景から教師に対して言いにくいと感じている可能性があり、日本においては、タイ人児童生徒や保護者の話を十

分聞く姿勢が大切である。

- ・タイ人児童生徒は、教師の存在が大きく、指示に従おうとするので、信頼関係を深め、的確な指導を行うことで伸びる可能性が高い。
- ・タイ人児童生徒は、日本人児童生徒に比べて、文字を書いて覚えるという習慣はあまりないので、少しずつ書いて覚える習慣をつけるよう指導することが大切である。
- ・タイにおける英語の授業は、小学校の時から週3時間程度あるので、ある程度英語を話すことができる。タイ人児童生徒とは、ある程度英語を使ってコミュニケーションをとることは有効である。
- ・タイでは、「一休さん」「ドラえもん」などのアニメが毎晩6時頃から放映され、子どもの中で流行っている。タイと日本と共通の話題から児童生徒の関心を引き出し、コミュニケーションや交流を深めることが可能である。また、自動車やバイク（モーターサイクル）、デジタルカメラやプリンターなどは日本製が多いので、そのようなことから、日本への理解の糸口とすることができる。

イ 開発協力について

- ・日本の政府開発援助（ODA）では、技術協力、有償資金援助、無償資金援助などが行われている。新バンコク国際空港の建設は、ほとんどが日本の有償資金援助である。新空港の建設は、成田空港や関西空港などと競合せず日本の国益につながることを、日本の支援の前提条件となっている。
- ・JICAから、タイからの要請に応じて、青年海外協力隊員やシニア海外ボランティアが派遣されている。今回の研修では、新空港の維持管理マニュアルの作成や、障害者施設での支援、工業研究所での技術支援等を行っている方々の様子を知ることができた。
- ・一人一人の隊員の使命感は高く、日本の技術を伝えるとともに、そのままではタイに活用できないので、隊員が帰国した後でも、タイ人が日本の技術を応用し活用できるよう配慮しながら活動している。
- ・インフラ（社会的経済・生産基盤）の整備の支援では、単に建築物（ハード面）を建てるだけでなく、それがタイの経済発展や生活改善につながるように、ソフト面での支援も大切である。

8 おわりに

今回のタイへの教員海外研修では、JICA兵庫の関係者、研修のコーディネート及び引率担当のPHD協会関係者の皆さまには大変お世話になった。

我々参加者は、今回の研修で学んだ成果をもとに、子ども多文化共生教育、国際理解教育、開発教育の視点からそれぞれ取組を実践し、その成果を広く広めていくことが求められている。

今回の報告書の作成にあたり、帰国報告会と2回の打ち合わせを行い、内容について検討を行った。次のページから掲載されている授業実践報告を参考に、各学校での取組の参考としていただくとともに、不十分な点についてはご指摘をお願いします。

訪問先から

	<p>「ホームステイ先のケーンさん家族」 クタカイ集落には高床式の家が多いが、ここは、1階の土間のコンクリートの上に、敷物を敷いて生活している。</p>
	<p>「ケーンさん宅の朝食」 米はもち米で、手で丸めて食べる。</p>
	<p>「バーンチャ中学校の教員と生徒」 この学校では、教員も生徒も上下体操服の制服を着用している。</p>
	<p>「クタカイ小・中学校の音楽の授業」 民族楽器に加えて、エレキギターがある。 楽譜はなく、音を聞いて覚えて、演奏する。</p>
	<p>「青年海外協力隊の米持隊員がつくった、肢体不自由児用の椅子」 お金がなくても、段ボールの箱で、その子どもにあった椅子をつくることできる。</p>
	<p>「バンコク市内のスアンブルースラム」 2004年4月に大火災があり、約8000人が家を失った。</p>

みんなちがって、みんなすてき！世界は1つ！！

神戸市立兵庫大開小学校 森田みや子

実践の目的

タイの東北部の農村での、3泊4日のホームステイで体験した村の生活は、驚きの連続でした。ゆっくりした時間の流れの中で、自然と向き合いながら暮らしている人たちの生活は、決して裕福ではないけれど、心豊かなものでした。突然の日本語や日本文化（折り紙・剣玉・じゃんけんなど）での交流にも、目を輝かせて取り組んでくれた子どもたちの伸びやかさを、ぜひ神戸の子どもたちにも育んでいってほしいと思いました。

担任する1年生の子どもたちには、2学期に入ってから、タイの話聞かせたりタイ語の絵本を見せたりしていたので、少し関心を持っていました。タイの記事が載る雑誌を学級文庫から見つけては、「先生、これタイやろ。」とうれしそうに見せに来て、あれこれ質問してくるほどでした。

そこで、1年生の生活科の「(外国の方と)いっしょにあそぼうよ！！」の単元の中で、タイの遊びを体験することで、さらに親近感が持てるようにしたいと考えました。幸い保護者の中にタイの方がいらっしゃったので、タイ語でのじゃんけんや絵本の読み聞かせをしていただくことができました。研修旅行で撮ったビデオの中で、タイの子どもたちが、熱心に、日本語での数字の言い方やじゃんけんに取り組む姿や、自分たちと同じようなせっせっせやゴム跳びを楽しむ姿を見たことで、より親近感を持つことができ、楽しんでタイ語をまねながら、タイへの関心を高めることができました。

また、自分の感動したタイ体験をできるだけ多くの子どもたちに知らせたいと考え、壁新聞を作って掲示することにしました。児童朝会で、タイ語であいさつをしたり、村で体験したことを話したりすることで、壁新聞への感心が増えてくれたことがうれしかったです。全校児童が、タイだけでなくほかの外国へも興味関心を抱き、理解を深めようとする気持ちと態度が育つきっかけになってくれればと願っています。タイ、韓国、中国、ブラジル（転校）、ベトナム（帰国）などの多文化を持つ子どもたちがいるわが校ではよりいっそう、同じ学校、同じ町で暮らすもの同士、それぞれの異文化を認め合い支えあって暮らせる学校および地域社会にしていけたらと願っています。

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方 法・内 容	使用教材
1～3時限 いっしょにあそぼう！！ (外国の方にその方の国の遊びを教えてください)	<p>(1時限目) タイの遊びをしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ タイ人の保護者の方のお話を聞く。 ・ タイの小学校の子どもたちのビデオを見る。 (タイのせっせっせ、ゴムとび、日本語でのジャンケン) ・ タイ語でジャンケンをする。 ・ 日本の絵本を、タイ語と日本語で読み聞かせる。(タイ語をリピートさせながら、聞く) 「999ひきのきょうだいたち」 <p>(2時限目) アメリカの遊びをしよう (予定)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 英語の歌を歌おう ・ 英語での紙芝居の読み聞かせを聞く。 (英語をリピートさせながら、聞く。) 「Brown bear Brown bear , What do you see?」 ・ 英語でジャンケンをする。 <p>(3時限目) 韓国の遊びをしよう (予定)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 韓国のゲストティチャーのお話を聞く。 ・ チャングの演奏を聞く。 ・ チャギを作って、遊ぶ。 ・ 韓国のジャンケンをする。 	<p>タイで撮影してきたビデオ</p> <p>タイの本屋で購入したタイ語と日本語で書かれた日本の絵本</p> <p>・ 地球っ子プログラムの講師</p>

授業の詳細

タイの遊びをしよう

タイ語でごあいさつ(サワディカーアー女の子、
サワディカッパー男の子)

(1) タイの方のお話を聞く。

ユピンさん(日本にきてから7年目)から、

- ・ 日本から5000キロ離れている。飛行機で6時間ぐらい
- ・ タイには王様がいること
- ・ フルーツがたくさんあること(ドリアとマンゴスティンを写真で紹介)



- ・日本は夏が短く、タイは冬が短く、2ヶ月ぐらい
- ・日本の味はやさしい、タイの味は、甘い・からい・すっぱい
- ・辛い味は、細い唐辛子のあじ、暑い国だから、辛いものを食べて元気になる。
- ・雨期と乾期があるなどを聞く。

(2) クタカイ村の小学校の子どもたちビデオを見る。

浴衣を着ている担任が、タイの子どもたちと数字の勉強

紙風船(日本の)でついで遊ぶ。

剣玉を喜んで遊んでいる

日本語でじゃんけん

タイのせっせっせをしている

民族楽器の演奏

(3) タイ語で絵本を読んでもらう。

(あとから、リピートして言う。)

(4) タイ語でじゃんけん

タイ語で、ありがとう(コップンカア、コップンカップ)



子どもたちの反応

- ・ タイの様子も興味深げに聞き、タイ語での絵本の読み聞かせでのリピートも、熱心に言うことができた。
- ・ タイの子どもたちのビデオも食い入るように見て、タイの子どもたちが日本語の数字を上手に言っているのを聞いて、感心していた。いい刺激を受けて、がんばってタイ語をまねていたように思いました。
- ・ 同じようなせっせっせやゴムたん(ゴム跳び)遊びをする、タイの子どもたちに親しみを感じていたように思います。
- ・ 一回一回大喜びをしてじゃんけんをすることができた。日本語でやっているのとなんら変わらないほど大喜びでした。

《子どもの日記から》

川	ア	サ	ン	ア	ほ	に	は	し	人	の	ほ	と	く	は	せ		
と	ロ	サ	ト	ン	ア	は	か	さ	か	く	ト	は	れ	に	た	ん	あ
あ	ま	ト	ト	ア	も	い	な	ム	り	に	ア	お	ま	の	ハ	に	た
ち	と	ん	よ	り	い	う	の	ハ	に	は	う	し	の	あ	し		
カ	カ	レ	ン	シ	バ	ク	カ	レ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ
ス	ー	ま	ン	イ	ア	い	た	に	い	の	ま	カ	ク	と	じ	ま	き
る	ア	し	あ	く	く	あ	け	あ	ウ	う	せ	い	は	い	の	し	と
か	す	た	せ	ん	だ	り	ど	あ	し	さ	ん	ち	と	こ	ん	た	う
ハ	カ	ク	人	ま	さ	ま	ム	ま	ま	け	こ	め	ば	ア	ウ	ウ	ウ
キ	あ	あ	せ	し	り	よ	あ	ち	い	う	と	と	ア	イ	ウ	ウ	ウ
お	子	い	いた	カ	カ	ン	た	り	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
つ	け	し	ア	ニ	し	カ	カ	マ	モ	す	い	じ	た	ン	ウ	ウ	ウ
け	カ	ウ	ユ	リ	の	の	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
な	あ	て	して	く	い	こ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ

第	サ	タ	い	と	タ	の	お	タ	エ								
ま	ワ	イ	キ	イ	テ	サ	イ	レ	ほ								
え	デ	の	た	よ	の	お	か	の	く								
だ	ご	い	き	こ	や	し	こ	た	は								
ね	カ	は	な	し	と	さ	ん	と	ま	カ							
	ウ	人	い	た	ば	し	た	ば	イ								
	ブ	左	ア	右	ん	カ	カ	カ	カ								
	た	ダ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ								
	ベ	い	ぼ	い	イ	と	と	と	と								
て	た	に	く	ア	は	の	ウ	は	は								
お	い	い	も	ぼ	く	人	で	重	重								
も	よ	ウ	タ	く	ウ	も	も	も	も								
し	ア	イ	で	お	お	お	お	お	お								
る	に	は	と	と	と	と	と	と	と								

い	い	が	で	は	わ	い											
て	よ	た	も	て	よ	か	う	き	タ								
い	い	べ	と	も	う	い	イ	イ	イ								
つ	よ	た	い	の	て	う	う	の	の								
く	い	い	て	う	あ	う	き	は	お								
り	が	で	も	い	い	れ	い	は	は								
し	ち	お	う	さ	し	て	タ	な	な								
ま	ま	い	わ	つ	が	い	イ	し	し								
し	せ	し	か	も	う	の	を	を	を								
た	と	い	り	ち	た	ん	お	き	き								
ち	せ	ド	ま	が	で	な	は	い	い								
が	せ	り	し	う	ぞ	こ	な	た	た								
ア	ア	た	し	と	し	と	と	と	と								
ア	よ	ソ	と	お	お	を	を	を	を								



成果と課題

- (成果)・小さいときから異文化に触れる機会を自然に持つことができる大切さを感じました。子どもたちは全身で楽しんだようです。また、行ってみたい、しゃべるようになりたいなど、興味関心が湧いてきたようでうれしいです。
- ・簡単だけれど、子どもたちの生活に身近なジャンケンに取り組むことで、どんな子どもも楽しく関心を持ってやれたのでよかった。
 - ・ユビンさんがとても喜んでくれたことも、保護者と教師の関係作りに役立ったと思いました。来年1年生に下のお子さんが入学してくるので、なおさらよかったと思いました。
- (課題)・1回きりの活動に終わらず、これからも継続して異文化に触れながら、自然に互いに認め合える人間関係が結べる資質を育てていかなければと思います。
- ・ネイティブのゲストをどう確保していくか。
 - ・在籍している他国籍の児童や母語が日本語ではない児童の心情をよく理解しながら、周囲の子どもたちを育てるとともに、本人の自尊心をも育てていけるよう、きめ細かな配慮をして取り組んでいかなければいけない。特に、高学年は。



壁新聞

(1) JICA 教師海外研修でタイにいったこと

- ・現地で購入したアジアとタイの地図で場所を知らせる。
- ・タイと日本は、600年前からのつながりがある。100人ほどの日本人街があった。今でもたくさんの日本人が、仕事やボランティアをしている日本人がたくさん住んでいる。
- ・現地の人と同じものを食べるということが、まずその国を知る第一歩である。
- ・クイズ(写真を見せて)で興味を持たせた
 - ・これは何? ・ベビーバナナ
 - ・お坊さんの学校の写真

- ・豚の頭の解体した鼻の穴に指を入れた写真。

(2) 東北タイの農村クタカイ村の暮らし



- ・タイ語の挨拶
- ・ホームステイさせていただいたサウエーさんの紹介
- ・高床式の家。→風通しがよい
- ・かべがない居間や台所の様子。
- ・プロパンガスはあるが、七輪を主に利用。
- ・トイレ&水浴び場
- ・雨水をためる。
- ・床下の活用（農機具・機織機）
- ・鶏が放し飼い→夜明けとともに村中の鶏が鳴いて朝を告げる。
- ・農機具のエンジンは日本製で、本体はタイ製。日本製は性能はいいが高い。
- ・食事風景—
もち米をにぎりながら、手で食べる。
かぼちやの花 いかの干物煮 タイの豆
- ・男の人の民族衣装・・・サローイ
- ・家の近辺の様子

(3) クタカイ村の小学校の様子



- ・職員室には王様の写真、祭壇
→タイは王国であり、仏教の国
庭に飾られているピーという精霊
- ・職員室には、先生の写真も掲示。
- ・子どもたちは制服を着ている。曜日によって、民族衣装の日・体操服の日などになる。
- ・先生も制服を着ている。
- ・学校では、民族楽器（楽器の名前）、民族舞踊を必ず習う。
- ・日本と同じようなゴムとび、せっせっせの遊びがある。
- ・日本の折り紙で、鶴や紙飛行機を折って飛ばしたり、剣玉をしたりして遊んだ。
タイ語と日本語での数字の勉強→タイ語がわからないので、身振りや合図するとわかってくれた。まねをして言った。
- ・日本語でじゃんけん遊びを楽しんだ。
- ・セバタクロウー竹で編んだボールをするサッカー

(4) タイと日本はつながっている



- ・大好きなものは同じ→日本で人気のハンバーガーショップやドーナツショップ
- ・コンビニで売られているグリコのお菓子や味の素
- ・日本製の自動車→トヨタだけでなく、ホンダ・ニッサンなど、あらゆる日本製の車が走っている。
- ・PHD 協会の研修生の方々。
 - ・1年間日本に有機農業や家畜などを勉強に来ていた人たち
 - ・兵庫大開小学校のすぐそばの井上さんのお家にホームステイされていた。
 - ・JICA 海外青年ボランティアの米持さん 特別教育センターで障害児の訓練の指導をしている。廃物利用しながら、子どもの体にあった椅子や訓練の道具を作って指導している。

・ JICA からの派遣の長谷川さん

国土交通局の職員で、JICA の派遣で新国際空港ができた後、うまく運営していくための方法を教える仕事をしている。

成果と課題

- (成果)
- ・全校児童にタイ王国の存在と様子をアピールすることができた。
 - ・最初、掲示しているだけだったので、気がつく子どもたちが少なかったので、児童朝会で話す機会を設けてもらうことにした。15分の短い間だったが、
 - ・タイ語の挨拶「サワディカップ」「サワディカア」(合掌)をする。
 - ・クタイ村でホームステイさせてもらった。
 - ・村の小学校の子どもたちといっしょに、日本の折り紙や剣玉で遊んだり、日本語の数字を勉強したりしてきた。
 - ・初めての日本語を、一生懸命まねして言ってくれた。
 - ・タイの子どもたちもせっせっせやゴムとびをして遊ぶ。
 - ・いろいろな国の人と出会ったり、近所に住んでいたりすることがあったら、優しい気持ちで、いろいろなことを教え合える人になってほしい。
 - ・担任が行ってきた、学年の先生が行ってきたということで、1年生も関心を持って見て、本の中のタイを見つけて喜んだり、タイ語の絵本を見たりできた。

- ・タイ人の保護者の方とお話ができ、壁新聞をすごく喜んでもらったことが1番よかった。バンコクの近くの町出身なので、自分の知らないタイが見れたことなど、すごくうれしそうに話してもらえた。

(課題)

- ・1年生から6年生までわかるようにと、内容を考えたが、自分のテーマである「みんなちがって、みんなステキ！」世界は一つ！！」に、どこまでせまられたかという点、自信が持てない。低学年と高学年に分けて、発達段階に応じた内容考えてもよかったかもしれない。



心をつなごう タイの友だちと

——— タイのことを知って、タイの小学校に手紙を書こう ———

神戸市立桂木小学校 村上力磨

1. 実践教科 総合的な学習の時間

2. 時間数 4時間

3. 対象学年 3年生（39名）

4. 実践の目的

- (1) タイの生活や文化にふれる中から、タイへの興味・関心を深める。
- (2) タイへの興味・関心を基に、タイの小学生に手紙を書いて交流を図る。

5. 実践にあたって

小学校の「総合的な学習」という限られた時間の中で、外国への興味関心を育てて、異文化への理解を深めていくためにはどうすればいいだろうか？この実践を読んでもいただく方に、「4時間」という比較的取り組みやすい時数の中で、子どもたちの外国への心の扉を開くための授業作りを紹介できればと思う。今回は、授業者である私が訪問したタイに焦点を当てた実践を紹介しているが、「この授業の構成が、おそらく他のどの国であっても取り組める」と言う視点を大切に授業プランを考えてみた。

6. 授業の構成（全4時間）

主題 「心をつなごう タイの友だちと！」

カラシン県ナケー郡 クタカイ小学校に手紙を書こう

第1時・・・タイの人々の生活や文化にふれよう (1時間)

第2時・・・タイの生活や文化を日本と比べて考えよう (1時間)
(タイの文化の良さを考える)

第3時・・・タイの小学校に手紙を書く計画を立てよう (1時間)
(手紙の中でどの様に日本文化伝えるか考える)

第4時・・・実際に手紙を書いてタイの小学校に送ろう (1時間)

7. 授業の実際の様子

(1) 第1時・・・タイの人々の生活や文化にふれる

①授業者のタイでの生活の様子をビデオを使って紹介する中から、タイの生活や文化を伝える。【タイ訪問記ビデオ】

②タイの文化を、実物を使いながら紹介する。

【辛口ポッキー】【セバタクロー】【タイのお金】【タイ語のノート】等

③心に残ったことを発表してもらう

《子どもたちの様子》

子どもたちは初めて触れるタイの文化に様々な驚きを抱いた。自然環境に関して言えば、

「田んぼが多く、緑に囲まれている」「学校のグラウンドや家の庭が芝生でおおわれている」「お風呂やトイレに自然の水が使われている」等の意見が多く見られた。食事に関しては、「手でご飯を食べる姿に驚いた」「色がとっても辛そうである」

(この授業で、子どもたちはタイ風ポッキーを食べて、その味に触れた)等の意見が飛び出した。今回の授業の焦点である「学校」に関しては、「桂木小のように英語を勉強しているのがいいと思った」「教室の雰囲気や黒板などが、日本とよく似ている」「タイの子どもはよく笑うし、みんなが元気そうだ」等の感想が出された。この授業を通して、「自分たちの文化とは違う国であるタイ」を身近に感じた子どもたちの心に、交流の土台を作ることができた。



(2) 第2時・・・タイの生活や文化を日本と比べて考える

①タイの生活や文化について日本との違いを考える

【ビデオや実物を思い出しながら】

②日本と似ているところを考える。

【ビデオや実物を思い出しながら】

③タイの人々の心のあたたかさを紹介する

【授業者のホームステイの経験から】

《子どもたちの様子》

「日本とは違うところは何でしょう」と言う授業者の問いかけに対して、「市場で売っている食べ物が違う」「フルーツの値段がとっても安い」「教室に国王の写真がある」「保健室が教室の後ろにある」「男の髪が、みんなとっても短い」など、次々に発表が行われた。私がタイで教えてもらった「セバタクロー」を紹介すると、日本では見たこともないスポーツに驚きながらも、国によって様々なスポーツがあること感じたようである。



「日本と似ているところは何でしょう」問い問いに対しては、「ご飯やラーメンを食べるところが似ている」「全校朝会があることや校歌を歌うこと、教室でもグループで座ることが桂木小と似ている」など、タイと言う国が日本にとって身近な国であることを感じ取ったようである。興味深かったことは、「ご飯を手で食べること」は、タイ独自の文化だといった児童に対して、「日本でも巻きずしやおにぎりは手で食べるから、むしろ日本とタイは似ている」と反論した児童があり、3年生ながら、外国の文化を見つめる視点の深さに驚かされた。

(3) 第3時・・・タイの小学校に手紙を書く計画を立てる

(手紙の中でどの様に日本文化伝えるか考える)

- ①タイの小学校に手紙を書く方法を考える
【日本語？ タイ語？ それとも英語？
絵で表現する手も】
- ②手紙の中で日本の文化を伝える方法を考える
【日本の文化ってなに？】
- ③準備物を考える
【ドラえものの絵 折り紙 あやとり 割り箸】

《子どもたちの様子》

「タイの子どもたちに手紙を書こう！」と言う授業者の提案に対して、子どもたちは目を輝かせながらこの異文化体験チャレンジに乗ってきた。それでは、「タイの小学校にどの様に手紙を書きますか？」という問いに対しては、「ひらがなを使って手紙を書いて、先生の友だちのノバドンさんに読んでもらおう」と



と言った具体的な意見が出たり、「一言でもタイ語を書いて喜んでもらおう」「ドラえもんやキティーの絵ならタイの子どもたちにも伝わるよ」と言った積極的な意見も出された。

「せっかく手紙を書くのなら、日本らしい物を手紙に付けたい」という意見をきっかけに、日本文化を紹介する様々意見が出された。「日本の子どもたちが得意な折り紙を作って送ろう」「あやとりの説明書を付けて、あやとりを送ろう」「手作りの割り箸を付けておくとびっくりするよ」等、実に様々な意見が飛び出した。この授業を通して、タイに手紙を書くという目的の中から、子どもたちは自然に「日本文化」に目を向け、日本の文化の良さを感じ取っていったようである。

第4時・・・実際に手紙を書いてタイの小学校に送る

- ①カラシン県ナクー郡 クタカイ小学校の友だちに手紙を書く
- ②できあがった手紙を紹介し合う

《子どもたちの様子》

子どもたちの手紙は、実に多種多様だった。絵の得意な子どもは、日本が誇るマンガの絵を書いたり、折り紙の得意な子どもは、「鶴や帆掛け船」を作って封筒の中に入れていた。「タイ語のこんにちわ」を教師から聞いて手紙に写す児童や、習ったばかりの英語で「How are you!」と書いた児童もいた。手紙を作りながら、「タイの友だちからの返事が来ればいいのに！」とつぶやく子どもの姿が、とても印象的だった。

こうしてできあがった手紙を互いに紹介しあいながら、日本と違う文化を持つ国の仲間とつながり会える楽しさを子どもたちは感じていたようである。

8. 成果と課題

タイの生活や文化を味わってみて、授業者が心を打たれたことはたくさんあった。例えば私が訪問したクタカイ村の小学校に関して言えば、

- ☆ 美しい自然環境が、伸び伸びした子どもたちを育てている
- ☆ 一人一人の子どもたちに目の輝きと何とも言えない優しさがある
- ☆ 小学校3年生からの英語教育
- ☆ 異学年での交流が活発
- ☆ 教師の指導のもと、礼儀や規律がしっかりしている

そうした教育のバックボーンにあるタイの文化について言えば

- ☆ 互いに助け合い、人とのつながりを大切にする心のあたたかさ
- ☆ 小さな事にはこだわらない「マイペンライ」の精神
- ☆ 家族での時間を大切にする毎日の生活
- ☆ 異年齢集団で日が暮れるまで遊べる子どもたちの生活の豊かさ
- ☆ 物よりも人とのつながりを大切にする態度

こうした良さを授業を通して子どもたちに感じ取ってもらい、外国の人々をより身近に感じ、異文化を持つ外国人に対して素直に心を開くことができる子どもたちを育てることが、授業者の大きなねらいであった。

(1) 成果

子どもたちは、タイという国の生活や文化の違いに驚きながらも、それを自分たちの住む国日本と比べながら、その特徴や良さをつかんでいったようである。

わずか4時間という時間ではあったが、「手紙を送る」という具体的な目標の下に、タイの文化の良さやふり返って日本文化の良さを見つめる貴重な時間となった。現在の「総合的な学習」という枠組みの中で、新しくたくさんの時数をとって国際理解に関する単元を起こせない学校でも、こうした形なら、無理なく異文化に接し自国の文化をふり返ることができるはずである。とりわけ、この実践は3年生で行ったが、初めて異文化に触れて世界に目を向ける導入の単元としては、時数的にも内容的にも比較的取り組みやすい単元だったと考える。これから、この手紙による交流が続き、日本とタイの子どもたちの心のつながりが、さらに深まっていくことが望まれる。

(2) 課題

こうして始まったタイの小学校との交流を、今後どの様に継続させながら、異文化への理解を深めていくことができるのかをしっかりと考えていきたい。そのためにも、日本に住むタイの方を子どもたちに出会わせるような授業が求められるだろう。今回の授業は、タイに行った学級担任が作る授業であったが、もしこの単元の中に、実際にタイの方を招待してお話を聞ければ、子どもたちのタイへのリアリティーはもっと深まり、タイを身近に感じることはできたであろう。

また今後、この交流を深めていくためにも、桂木小サイドの私とクタカイ村小学校の担当者が、連絡をしっかりとれるようにしておくもあるだろう。

世界のみんなが幸せになるために

～伊水から世界をのぞこう～

宍粟市立伊水小学校教諭 藪元 佐和子

実践教科 総合的な学習の時間・道徳

時間数 20 時間

対象学年 5 年生

対象人数 15 名

実践の目的

① 地域の実態

現代の私たちを取り巻く状況を見ると、国際情勢や環境問題など、もう自分たちの国や地域のことだけを考えてはいけな世の中になっている。また、国内を見ても、海外からの移住者が増加し、学校現場においても子ども多文化共生教育は必要不可欠である。

本校は県南西部の山間部に位置しており、周りは山や田に囲まれた穏やかな環境で、昔からの地域の結びつきも強い。しかし、実際に校区の近くに、外国から集団で仕事に来られていたり、本校にも母親が外国人の子どもがいる。

② 子どもの実態

子どもたちはというと、物質的に大変恵まれ、周りにはものがあふれて、そのことが「当たり前」と感じている。実は世界にはそれらのことが当たり前ではなく、自分たちの命でさえ危ぶまれるような毎日を送っている子どもたちが大勢いることはあまり知られていない。また、そのことをあまり意識せずに生活をしている。さらに、自分たちが日頃行っていること（エネルギーの大量消費・水道水の使いすぎ・食べ残し）により、世界のどこかで困っている人がいる、ということにも気づいていない。

また、本校は全校生 97 名、5 年生児童も 15 名という小規模校である。日常生活の中でも小さい世界で競争したり、逆に自分の殻に閉じこもってしまったりして、子どもたちの視野が狭くなっていることも否めない。

③ 指導にあたって

世界の国々のことを学習することにより、今までの自分の生活を振り返るとともに、毎日の生活のどこかで世界中の友達のことを思い、活動してくれる児童の育成を目指す。そして将来、目先の小さい世界に捕らわれず、より広い視野を持ち、グローバルな考え方をを持った人間になってほしいと願っている。

また、5 年生では国語や社会でも環境問題が出てくるので、それとも関連づけて学習できるよい機会であると考えます。

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
<p>1時限 総合学習「タイってどんな国？」</p> <p>タイの生活や様子や食べ物を触れ、これからの学習の導入とする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ タイってどんな国？ ①国の位置 ②学校 ③タイ語 ④食べ物 <p>タイで撮影したVTRで説明したり、実際にタイのお菓子を食べてたりして、タイに触れさせ、これから世界の国々を調べることに興味をもつ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ タイで撮影したVTR ・ タイで購入した食べ物（タイ独特のお菓子）
<p>2～13時限 総合学習「伊水から世界をのぞこう」</p> <p>外国の人々と交流する中で、文化の違いや心の触れ合いを体験する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ PHD協会研修生マスラルさん、インド料理店のサリタさんたち、ALTのジョー先生と交流 <p>調べ学習（各2時間）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 交流の前にその人の国について調べる。（国の概要・食べ物・服装など） <p>交流（各2時間）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 当日は調べたことの発表を聞いてもらい、その上で、その国について教えてもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ インターネット ・ 図書館の本 ・ 模造紙
<p>14～15時限 道徳「もしも、世界がひとつの村なら」（ほほえみ）</p> <p>国際理解と親善の心を育て、互いに協力して世界の平和に役立つ人間になろうという心情を育てる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 100人の村がどんな村か、一つひとつの課題について、考えを深めていく。 ・ 「村の人々みんなが、なかよく幸せに生きていくことについて考える。 ・ 実際に活躍している人々を紹介する。 ・ 「小学生の自分たちにできること」を考えよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 副読本「ほほえみ」 ・ 「もしも、世界がひとつの村なら」（池田香代子 再話 C. ダグラススミス 対訳） ・ 「100人の村」ワークショップ ・ 「トットちゃんが出会った子どもたち」（田沼武能：岩崎書店） ・ タイで活躍する人々（VTR）
<p>* 外国の人々と触れ合おう（地域行事）</p> <p>地域の行事に参加することによって、自分たちの近くにも外国の方々が住んでおられることを知り、普段の生活の中での交流のきっかけを作る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中央市国際交流フェスティバルに参加しよう <p>①サインカードにサインをしてもらいながら、交流を深めていく。</p> <p>②色々な国の料理を食べることで、様々な食文化があることに気づく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ サインカード

<p>16～18時限 総合学習「使用済み切手を集めよう」 世界の子どもたちのために使用済み切手を集める</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・使用済み切手収集を全校に呼びかける。 ・お家の人にもお願いのプリントを作る。 ・集めてもらったクラスに感謝状を贈り、お家の人にもお礼の手紙を送る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・画用紙 ・感謝状
<p>19～20時限 総合学習「タイの小学生に手紙を書こう」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・タイの小学校の児童に向けて、手紙を書く。 ・手紙と一緒に折り紙も同封する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・便せん ・折り紙

授業の詳細

1時限 総合学習「タイってどんな国？」

① 国の位置

世界地図で確認した。どこにあるのかほとんどの子どもが知らなかった。「聞いたことはあるが、どんな国か知らない。」といった状態だった。

② 学校

VTRを見ながら説明していった。先生より児童が先に来て掃除をしていることや、給食があることにも驚いていた。

③ タイ語

タイで購入した単語表（壁に貼るタイプ）や、単語練習ノートを見せた。初めて見る文字に興味津々であった。

④ 食べ物

「ラープ[※]味のポッキー」「バナナチップ」など、比較的食べ慣れた味のものだったので、おいしそうに食べていた。※) 東北タイの代表的な肉料理

2～13時限 総合学習「伊水から世界をのぞこう」

1) PHD協会研修生マスラルさんと交流しよう

- ・インドネシアについて班ごとに調べた。
(概要・食べ物・果物)
- ・マスラルさんにインドネシアについて調べたことを聞いてもらった。
- ・発表後、インドネシアについて教えてもらった。
- ・インドネシアの農村のスライドも見てもらった。
- ・マスラルさんの好きなスポーツがサッカーと聞いて、運動場で一緒に遊んだ。

「一緒にサッカーをしたよ。」→



(2) サリタさんたちと交流しよう

- ・インドについて班ごとに調べた。

(概要・食べ物・服装)

日本についても調べた。

- ・インド料理店に招いていただき、インドについて調べたことを発表した。日本についても教えてあげた。
- ・インドについて教えてもらった後、インド料理を作るところを見せていただき、実際に食べさせてもらった。

「香辛料について教えてもらったよ。」→



3) ジョー先生と交流しよう

- ・イギリスについて班ごとに調べた。

(概要・有名人・食べ物)

- ・イギリスについて調べたことを発表した。
- ・発表後、ジョー先生にイギリスについて教えてもらった。
- ・ジョー先生もサッカーが好きだということで、一緒にサッカーをした。

「イギリスにはビッグベンという建物があるんだって。」→



子どもたちの感想

〔マスラルさん〕

- * インドネシアは、島が何かあって、マスラルさんが住んでいるところは、たてに長い島でもおもしろい形をしているなと思った。
- * 日本と同じような食べ物でも、名前も違うし何となく同じじゃなかった。川の魚の方が海の魚よりおいしいと聞いて、びっくりしました。
- * マスラルさんの家は木で、手作りだからすごいと思った。それに、田植えもいつでもいいというので、びっくりしました。
- * インドネシアの田んぼは山にあって、いねかりをする時には、村の人と相談すると聞いた。
- * 日本の畑は囲いがあるけど、インドネシアは囲いがありませんでした。ななめに上手に作っていました。
- * インドネシアでは、結婚したら男の人がおくさんの実家の方へ行くと、初めて知りました。
- * インドネシアはぼくらと違って貧しい国なんだなと思った。
- * マスラルさんは、サッカーがうまいなと思った。ぼくもサッカーの練習をがんばろうと思った。

〔サリタさん〕

- * 夏が4月、5月だと聞いてびっくりした。同じインドでも地域が違うと言葉も違っているんだなあ

と思いました。

- * 英語を3才から習うと聞いておどろいた。インドのジュースはあますぎて飲めなかった。でも、ナンはおいしかった。またナンを食べに行きたい。
- * インドは日本と食べ方も違うから「すごい違い!」と思った。
- * インドの料理を初めて食べたから、うれしかった。
- * インドは馬車と牛車とラクダの車で、いろんな乗り物があるんだなあ。
- * 折り鶴を差し上げると、とてもうれしそうな顔をして、さっそくかざってくださったのでうれしかった。

〔ジョー先生〕

- * イギリスはいろいろな地方に分かれているんだな。
- * イギリスにはデビット・ベッカムや、いろいろな有名人がいるのが分かりました。
- * イギリスにはめずらしい動物とかフルーツがあるから見てみたいと思った。
- * イギリスの紅茶は、クッキーといっしょに食べるとおいしいと教えてもらいました。
- * イギリスでは、うさぎを食べると聞いて、びっくりしました。

14～15時限 道徳「もしも、世界がひとつの村なら」(ほほえみ)

(1) 100人の村がどんな村か考えよう

- ・ 言葉だけでは理解しにくいところは「トットちゃんが出会った子どもたち」(田沼武能)の写真を提示したり、「100人村」のワークショップをしたりして、村の様子をより深く理解させた。

(2) 「村の人々みんなが、なかよく幸せに生きていく」ことについて考えよう

- ・ 実際に活動している人々がいることを知ってもらうために、タイで撮影してきたVTR(青年海外協力隊隊員、シニアボランティア、JICA技術専門員、PHD協会)を見せた。
- ・ 小学生の自分たちにできることはないか考えた。その結果、「水を大切に使う」「給食やご飯を残さず食べる」「文房具を大切に使う」など、自分たちの日常生活を見直す意見が出された。そして、具体的な活動として「自分たちの力でできること」ということで、『PHDレター』を参考に、使用済み切手を集めることにした。

子どもたちの感想

- * 言葉は話しにくいですが、心が通じ合っていたらいいと思う。
- * ぼくらはかぜをひいたら1,2日で治ったりするけど、外国では風邪をひいたら薬を買うお金がないから死ぬ子もいたりして、ぼくはとてもぜいたくなんだなあと思った。
- * きれいな水を飲んでいる人もいれば、きたない水しか飲めない人、栄養がない人やある人がいたりだから、助け合うことが大切だと思った。
- * 生活がちゃんとできる人とできない人がいるので、みんな元気に生活する方がいいと思った。ぼくたちはとても幸せな生活だと思った。
- * 学びたくても学校に行けない。涙が出そうだった。悲しかった。
- * ぼくは、いつも「今日、学校か～。いやなあ。」と思います。でも、学校に行けない子は「はよ、

勉強やりたいなあ。」と思っていると思います。

- * すごくかわいそうな人もいれば、幸せな人もいる。複雑な気持ちだけど、世界のことがよく分かりました。
- * 「世界がひとつだったらいいなあ」と思った。
- * 私たちができることは「してあげたい。」と思いました。
- * たくさんごみを出さないで、ごみを少なくしたい。
- * みんなで栄養を分け合えばいい。そして、みんな元気なほうが世界全体が幸せ。

「外国の人々と触れ合おう」 (地域の行事に参加)

- ・隣の校区で行われる宍粟市国際交流フェスティバル(休日に開催)に参加するよう呼びかけると、お家の人の協力もあり、クラスの約半数が参加した。
- ・各々サインカードを持ち、外国の人々に話しかけ、サインをもらった。色々な国の料理も食べた。



「フィリピンのカレーはどんな味かな。」→

17～18時限 総合学習「使用済み切手を集めよう」

- (1) 使用済み切手収集を全校に呼びかけよう
- ・「小学生の自分たちにできること」として、道徳の時間考えた使用済み切手集めを実行した。
 - ・自分たちのクラスだけは限界があるので、児童集会で全校に呼びかけ、お家の人にもお願いのプリントを作った。
 - ・集めてくれたクラスに感謝状を贈り、お家の人にもお礼の手紙を書いた。1ヶ月ほどで、1,894枚集まり、みんなで協力することの大切さを実感した。
 - ・集めた切手は、PHD協会に持って行き、活動に役立たせていただくことになった。

「切手の周りはきれいに切り取るんだよ。」→



子どもたちの感想

- * 全校に呼びかけをして、1,894枚も集まって、それが人の役にたつことだから、できてよかった。
- * 最初、ドキドキしました。なぜかというところちゃんと集めてくれるか心配だったからです。でも、たくさん集まってよかったです。
- * 人のために働くってしんどいけど、やった後は気持ちがよくて、みんなのおかげで1,894まいも

集まりました。

19～20時限 総合学習「タイの小学生に手紙を書こう」

- ・「自分たちにできること」を考えたときに「手紙を書く」という意見もでていたので、手紙を書くことにした。
- ・タイでホームステイさせていただいたお家の子どもさんの小学校に手紙を書いた。
- ・タイ語は難しいので、アニメのキャラクターを描いた
- ・タイ語表を見ながら、タイの単語に挑戦する子どももいた
- ・折り紙の作品も一緒に送った
「あんばんまんも、知っているかな。」→



子どもたちの感想

- * アニメが人気と知って、ポケモンの絵を描きました。喜んでもらえたらいいなと思いました。
- * 折り紙や絵を描いてあげたのが、とても楽しかったです。タイの子がお返事をくれたらうれしいです。
- * 言葉は書けないけど絵だと分かるから、絵を描いて送りました。

成果と課題

2学期の総合学習として行ってきた「伊水から世界をのぞこう」。昨年からの取り組みで、今年2年目を迎えた。昨年度の反省から、今年は実際にいろいろな外国の方々と触れ合っていた。日程調節など、大変なこともあったが、ただインターネットや本で調べるだけでなく、人対人の触れ合いを体験してほしかったからである。

実際に始めてみると、こちらが考えていたよりはるかに自然に、相手を受け入れていく子どもたちに驚くとともに、非常にうれしかった。言葉や文化は違っても、気持ちや優しさは通じる。そんなことが実感できたようであった。

その後、道徳で学習した「もし世界が100人の村なら」では、日本以外の国、そして今まで自分たちが触れ合ってきた人たちの国の実情を知り、非常にショックを受けていた。しかし、交流を行っていたことにより、自分たちの知らない遠い国の出来事ではなく、「サリタさんたちの国」「マスラルさんたちの国」としてとらえていた。インドネシアの津波が起きたことを聞いた時には、「マスラルさんの家、大丈夫だったのかなあ。」と心配してくれる子もいた。また同時に、世界の国々のために実際に活躍している人々がいる、ということにも驚いていた。

「自分たちにできること」を考えて行く中で、一番大切なことは今の自分たちの生活を見直すこと、そして何より世界の子どもたちのことを忘れないことである。ということに気づいた。

これからも「地球の一員」として、世界的視野を持って活動していってくれることを願っている。